彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ

中根千絵

一、はじめに

論者は、『説林』53号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題には『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Ｂに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Ｂより良い本であろうと論じた。[1] しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。巻一については、前の紀要で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Ｂとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』53号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということが判明している。[2] 巻二についても同様に、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻二の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、今回は、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注[3]から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

巻二の分析において注目すべき点は、底本が鈴鹿本であるということである。鈴鹿本は、現在、京都大学が所有している本であるが、現存本唯一の最も原本に近い古態本である。酒井憲二氏の書かれた「鈴鹿本今昔物語集研究史」[4]によれば、従来から鈴鹿本は「祖本的性格の顕著であることが指摘されてきた」が、「修復に際して行われた加速器質量分析法による炭素14年代測定によって、鈴鹿本の綴じ目に使用されていた最古の紙よりの年代が一〇一八年から一一五九年であることが証せられた。まさに本書の成立時期と重なる年代であ」り、「鈴鹿本は今昔物語集の原本か若しくは限りなく原本に近い写本と断ぜざるを得ないようである。」としている。原本に近い本文の今尚、残存する巻二の場合には、どれほどのぶれが諸本間で生じているのであろうか。その分析の結果については、「おわりに」の項に記すこととする。

二、彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。（但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。）★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「　」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本（鈴鹿本）【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると考えられることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】甲

—東大本甲　北—東北大本　野—野村本　以上古本　乙—東大本乙　A—内閣文庫本A　B—内閣文庫本B　C—内閣文庫本C　以上流布本　鈴鹿本を除く諸本—諸
彦—彦根城博物館所蔵本
大—旧日本古典文学大系

巻二第一話

一二四7　五十日旬ノ　甲北乙ABC（Bは日に由ィと朱傍）
12　无限リ　乙AB（Bはリを朱括弧で囲みイと朱傍）
12　照サレ　乙ABC
15　本経　、　乙ABC
16　絶畢給ヒヌ　底乙ABC
一二五2　大王ノ香湯ヲ塗テ　AB
4　御棺ノ荷ムト　乙ABC（ノにBはヲィ、Cはヲと朱傍）
8　墓所　乙ABC「乙の墓は変」
8　海ノ邊リ　乙ABC
9　焼キ奉　乙AB

巻二第二話

一二五15　佛母　乙ABC（Cは佛の右下にノと傍書）

15　生奉テ後　甲北野乙ＡＢ（甲は生・後の字体不整　生歟・後と傍書）
「生奉テ後（ノチ）」Ｃ「佛ヲ奉テ後」底大
「底本以外の諸本は「佛ヲ」が無いので文意定かに通じがたい。」

16　教化シ給フハ　乙ＡＢＣ（Ｂはハの左傍に朱圏点）

一二六　4　佛ノ勅ヲ教受テ　諸（底は勅の上に挿入符・教の右傍に顛倒符あり、Ｂは本ノママと朱傍）「仏ケノ勅（チョク）ヲ教へ受テ」Ｃ「佛ノ教勅ヲ受テ」大
底本、「教」は「受」の前に在って顛倒符がついている。「諸本はこれを理解し得なかった為に本文が乱れてしまった。」

6　摩耶夫人ノ宣ハク　甲北野乙ＡＢ

7　摩耶夫人此ヲ見テ　乙ＡＢＣ

9　見給テハ　ＡＢＣ

10　母ニ向ヒ　乙ＡＢＣ

11　摩耶法ヲ聞テ　諸

16　佛ノ〔　脱　〕在　「佛ノ〔御言ヲ語ルニ、衆生皆、此ヲ聞テ愁ヘ歎ク事无限シテ云ク、我等、未ダ佛ノ〕在」大

一二七　2　速　ＡＢ（Ｂはニィと朱補）

4　天帝釈迦佛ノ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは釋）

4　知シテ　底甲北野Ｂ

5　瑪瑙　ＢＣ

6　相ニ見ム叉　乙ＡＢＣ（ニをＢは朱括弧で囲みイと朱傍、Ｃはヒと朱訂　乙ＡＢＣは事）

7　涙　　乙ＡＢ
7　佛ト母ト　　甲北野乙ＡＢ
7　宝ノ階ヲ　　諸
8　歩ニ　　乙ＡＢ（Ｂはミィと朱傍）
8　下リ給フ　　乙ＡＢＣ
10　皆並居タ　　Ｂ（タにリィと朱傍）

巻二第二話の後、十一行空白

巻二第三話

一二七14　第□　　諸（以下諸本すべて第の下の数字を欠く）
16　大小便利潤ヒ　　乙ＡＢＣ
16　襄ナムテ　　大「キタナムデはきたなく思っての意。内閣文庫本Ｃ、イトナムデとよませているのは、イトフ意を寓したものらしい。」

16　居タル所ニモ　　野乙ＡＢＣ

一二八5　喩ヌ　　乙ＡＢ
10　其人ノ　　乙ＡＢＣ
11　邪ニ　　ＡＢＣ
13　病比丘也　　乙ＡＢＣ

巻二第四話

一二九 3 卒堵波　北野乙B
5 何ノ故有テカ　乙ABC
7 此ノ國　乙ABC（Bはノを朱括弧で囲みイと朱傍）
8 懐妊シテ　乙ABC
9 而三人ノ　乙AB（Bは三にニ一ィと朱傍）
10 生レテヨリ　乙ABC
11 云ク　ABC（Bはクを朱括弧で囲みイと朱傍）
13 我ソ　A
13 者ナレトモ　乙AC（Cはトに朱濁点　モみせけち）
14 後ニ　乙ABC
14 歸シナム　★「歸シナムヨリ」乙ABC（Bのヨリは朱補、Cのムはン）「歸シナムヨリハ」底甲北野大
16 為ニ　北野乙ABC

一三〇 1 長命ト　乙ABC
1 三ノ悪道ニ　甲北野乙AB
4 五百釵ヲ　乙ABC
7 失ヒ給ヒキ　乙ABC
7 生レテ　乙ABC
9 孝養ノ為ニ　B

12　敓　　乙ＡＢ（Ｂは殺ィと朱傍）
13　奪フ有リキ　　諸
14　嘔旃陀羅樹　　野乙ＡＢ（野の嘔は変、Ｂは嘔の左傍に朱圏点）

巻二第五話

一三一　7　雨風ハ　　乙ＡＢＣ
10　死スヘカリキ　　諸（甲はカの字体不整　カと傍書）
11　受ケ　　乙ＡＢ

巻二第五話の後、四行空白

巻二第六話

一三二　3　家ニ　　乙ＡＢＣ
6　病テ臥タル　　ＡＢ
6　米ノ汁ヲ　　諸
11　事ソヤ　　乙ＡＢＣ（Ｂは事に何ヵと朱傍）
11　轉輪聖ノ　　ＡＢＣ
13　死ヌ　　底甲北野乙
14　魏威神　　諸
15　天ニ　　乙ＡＢＣ
16　受ル叟　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは事）

一三三 2 歸ス　北乙ABC
3 微妙也ト　北乙ABC
4 布施　諸

巻二第七話

一三三 8 阿般提國　乙ABC
13 貧ヘクハ　ABC
13 賣テムト　甲北乙AC
14 言　乙ABC（Cはニと朱補）
15 衣貧　乙B（Bは貧に食ィと朱傍）
15 施セム　底大（Bはセにサィと朱傍）
16 移シ入レハ　北乙ABC
一三四 2 春ヲ炊ク　乙BC
3 向テ　乙ABC（Bは向の左傍に朱圏点）
3 開テ　北野乙ABC
5 坐シツ　乙ABC
5 悪ヲ　乙ABC
6 暁ニ　底野ABC
9 尸骸ヲ　乙ABC
12 供養シ　乙ABC

13　二天ノ為ニ　乙ABC（Cは二天を天子と朱訂）
13　二百ノ　乙ABC
13　須陀洹果ヲ得テ皆　諸

巻二第八話

一三五　4　端正ナル事　諸
7　取リ用ヌ　乙ABC
7　長大ニテ　乙AB
7　身才　乙ABC
7　心達レリ　乙AB
8　求メ　諸（北はメにヌと傍書）
11　飯食　底甲北野AB
12　類無之　乙AB（Bは之にシィと朱傍）
12　然レハ金光明ニ嫁テ　甲北野乙AB
13　佛為ニ　乙ABC

一三六　2　毗婆尸佛　北乙ABC
4　舛合ノ　乙ABC（乙ABCは升）
4　村人ノ　乙ABC
5　辟上ニ　乙B（Bは辟に臂ィと朱傍　辟の下にノィと朱補）
9　祖舊キ屋ニ　乙ABC（乙の舊は変、Bは祖の下にノィと朱補）

9　並ク　　底甲北野乙B（Bは普ィと朱傍）

巻二第九話

一三七8　天七宝ヲ雨ラン　　甲野乙ABC

12　一奉ノ　　甲北乙ABC（甲は拳と訂す）

12　去ヲ　　乙AB（Bはヲにティと朱傍）

13　奉テ　　甲北乙ABC（甲北は拳と訂す）

13　貧人　　乙ABC

14　積ミ満　　乙AB（Bはミを朱括弧で囲みイと朱傍）

一三八1　善根ヲ　　乙ABC

巻二第十話

一三八6　奉テ　　甲北乙ABC（甲は拳と訂す、北は圏点、Bは擧と朱傍）

6　聞テ　　ABC（Bは開ィと朱傍）

8　盡シ叉　　ABC（ABCは事）

12　奉テ　　甲北乙BC（甲は拳と重書、北は圏点、Cは奉みせけちにて拳（ニギッ）と朱傍）

一三九1　奉テ　　甲北野乙BC（甲は拳、野は拳ィと傍書）

巻二第十一話

一三九9　抱レリ　　諸（甲は抱の字体不整　抱と朱傍、北はレリにケリと傍書）

11　依テ　底大「内閣文庫本C「依」の偏旁を逆にした動用字に作り、ヨッテとよましめたり。」

12　布施ヲ　北乙ABC

12　抱レル　北乙ABC

15　開クニ　乙ABC

一四〇1　母　諸（Cは母の上に父歟と朱補）

1　是ヲ許シツ　乙ABC

3　金銭　甲北乙ABC

4　告テ宣ハク　乙ABC（Bはハを朱括弧で囲みイと朱傍）

5　四方塔ヲ　B

6　發シテ　底ABC（ABCは發、底は菱）

8　只今　底大

「底本の傍書に「又歟」と見える如く「亦」の譌であろう。」底本は「亦」の字に手を加えて「只」にしたようにみえる。

巻二第十二話

一四〇16　一指ヨリ　諸

一四一3　諸物　諸

4　来リ給ヘルヤト　乙ABC

4　宣ツ　乙AC

5　申サク　乙ＡＢＣ
6　成シマス　乙ＡＢＣ
6　児為ニ乗セテ　乙ＡＢＣ（Ｃは為の左傍に馬歟と朱傍）
8　多財ヲ　甲野乙ＡＢＣ
8　還シ遣シ　乙ＡＢＣ
10　誰族　乙ＡＢＣ（Ｂは左傍に朱圏点、Ｃは左傍に親歟と朱傍）
11　失テ　乙ＡＢＣ
11　寄リ煙　諸（甲北野のムは栖の旁に著しく接近し、乙は一字の如くに作る、Ａは乙の変、彦ＢＣは木×煙の旁、Ｃ傍訓タノム）
12　自ラ思ハク　乙ＡＢＣ
12　貧窮ニ成テ　諸
16　須臾ノ間　乙

一四二
2　返歸来リ　乙ＡＢ
6　此ヲ見テ　乙ＡＢＣ
6　燈指比丘ノ因縁ヲ　乙ＡＢＣ（Ｂは丘の下に何歟、Ｃはノの下に何ナルと朱補）
7　屍ノ金ト成テ　乙ＡＢＣ
7　隨レツト　Ｂ（レツにシソィと朱傍）
8　子ニ有リキ　乙ＡＢＣ
12　指ヲ　乙ＡＢＣ
12　發シテ　乙ＡＢＣ

12　功徳ニ　乙ＡＢＣ
14　光放チ　ＡＢ
15　損シ鈌給ヘテム　Ｂ（鈌に欽ィ　テにラィと朱傍）

巻二第十三話

一四三　4　叔離　底甲北Ｂ乙（底甲北Ｂの叔は異体、乙は異体の変、Ｂは齋ィと朱傍）
9　成ス　乙ＡＢＣ
12　申シテ　乙ＡＢＣ
13　人民ヲ　底野乙ＡＢＣ（底はオの上にヲと傍書）
13　参テ　Ｂ
14　檀感加　乙ＡＢＣ
14　貧窮シテ　乙ＡＢＣ
16　夫ハ家ニアリ　諸（有リを乙は有、ＡＢＣはアリに作る）
一四四　1　法ヲ説キ　諸（Ｂは左傍に朱圏点）
3　夫　乙ＡＢＣ（Ｂはニィと朱補）
7　許サムト　甲野乙ＡＢＣ（Ｃのムはン）
8　布施可行ト　Ｂ
9　身ノ上ヲ　乙ＡＢＣ（ヲにＢはノィと朱傍、Ｃはノと朱訂）
10　若者　乙ＢＣ（若にＢは着ィと朱傍、Ｃは着カ（キル）と朱傍）
13　面ノフタリ　乙ＡＢ

14　可着替ヲ　乙ＡＢ（Ｂはヲにナシィと朱傍）
14　他ノ物无シ　乙ＡＢＣ
16　至テ　乙ＡＢＣ（Ｂは左傍に朱圏点）
16　清浄ナル　乙ＡＢＣ
一四五1　后ト基法ヲ　乙ＡＢＣ
2　金ノ衣　乙ＡＢＣ

巻二第十四話

一四五13　形造リ　乙ＡＢＣ
一四六1　涅槃入テ　甲北野乙ＡＢ
2　舎利ヲ以テ　諸
3　内　諸
3　宮内ニ　乙ＡＢＣ
5　不財也　乙ＡＢＣ
6　修シ給ヘリケルニ依テ　乙ＡＢＣ
7　亦此レテ勝レム　乙
7　前身　北乙ＡＢＣ
9　掃フル　諸（底の掃は変、即ち木偏に作る）
10　宿ス　甲北乙ＡＢＣ
11　右ノ手　諸

12　生ル　乙ABC
13　一ノ　乙ABC
一四七1　金銭　乙ABC
2　見付タリ　乙ABC

巻二第十五話
一四七8　今昔　諸
10　常ノ　乙ABC（Bはニィ、Cはニと朱傍）
11　詣スル　乙AB
12　宝ニ堕ラムト　B（堕に不審紙を押したり）
13　宝ニ堕ル　BC
14　叉利國　乙ABC（乙ABCは国）
16　許テ、　乙ABC（Bはテ、にニと朱傍、Cは直上の波斯匿王ノのノにニ歟　許ニ詣歟と朱傍）

一四八3　歸ス　乙ABC
3　返シ遣ス事　乙A
4　无クテ　乙AB
7　外祖父　乙ABC
7　此ノ外孫ヲ見テ　諸（Bはノを朱括弧で囲みイと朱傍）
11　其時　BC

11　壊レタル　乙ＡＢＣ（Ｂはシにレィと朱傍）
12　年少ノ　野Ｂ「年廿ノ」乙ＡＣ（Ｃ傍訓ハタチ　左傍に比歟と朱傍）「年小ノ」底甲北大
「古本は一致して小に作る。」
12　行キ過テ　諸「行キ遇テ」底大
「諸本「過」に作るのは、文意を理解できなかったための改変であろう。」
12　見　乙ＡＢＣ
一四九1　受セラル　乙ＡＢ（Ｂは愛ィと朱傍）
2　出家シ　乙ＡＢＣ

巻二第十六話
一四九9　撰ハス　諸
9　后トセムト為ルニ　諸「后トセムガ為ルニ」底大
「底本の本文はセムガ為という旧表現の痕跡を示すものであろう。」
12　足レリ　乙ＡＢＣ
13　宣旨ヲ　乙ＡＢＣ
13　家主　北乙ＡＢＣ
14　何ノ人ノ　乙ＡＢＣ
5　后ニ立給ツ　乙ＡＣ
6　喜ヒ思ヌラムト　Ｃ
7　心苦ク　諸

8　聞テモ　諸
10　毒蛇ヲ　乙ＡＢＣ
16　奇異也ト　諸
一五一　2　人有リキ　北乙ＡＢＣ（乙の有は変）
3　其ノ門ニシテ　甲北野ＡＢＣ
3　息ミシ間　諸
4　一念ニ　北野乙ＡＢＣ（北のニは傍書の如し）
7　香ク　乙ＡＢ
7　如此シ　甲北野乙ＡＢ
8　佛　乙ＡＢＣ

巻二第十七話
一五一　14　身金色ニメ　諸（諸はシテ）
一五二　8　身躰金色ニシテ　底甲北野
8　放チ　底甲北

巻二第十八話
一五三　3　名ヲ　乙ＡＢＣ
3　摩訶却慶那　Ｂ
4　守リ　乙ＡＢＣ

5　敵心ヲ　乙ＡＢＣ（乙の敵は変）
6　王ヲ　乙ＡＢＣ
8　出家シ争　Ｂ（畢ィと朱傍）
8　得　ＡＢＣ
8　見　甲北野乙ＡＢ（北はテと傍書）
9　魏々トシテ　甲北ＡＢ野乙（野乙の魏の偏禾、甲はその変、北ＡＢ野乙甲はゝ）
12　崩レ壊レタリ　乙ＡＢＣ
13　勧メテ仕テ　ＡＢ（Ｂは仕に不審紙を押したり）
一五四1　小王一万八千人　乙ＡＢＣ「小王万八千人」底甲北野大
1　昔ニ　乙ＡＢＣ
2　依テ　底大　内閣文庫本Ｃ、「依」を動用字に作る。
2　得ル也ト　諸

巻二第十八話の後、二行空白

巻二第十九話
一五四5　阿難那律得　諸（底は難みせけち、Ｂは左傍朱圏点）
12　箭彈ヲ　乙ＡＢＣ
一五五1　カレハ　野ＡＢＣ「カカレバ」底甲北乙大（甲北は虫喰の跡を書き傍書す）

巻二第二十話
一五五5　薄拘羅　底甲北野乙ＡＢＣ（彦乙ＡＢＣの薄は草冠＋縛）

5　善根　諸
7　當　乙ＡＢＣ（Ｂは其イと朱傍）
11　作ルヲ　乙ＡＢＣ
12　身ハ　乙ＡＢＣ
16　速ニ　乙ＡＢＣ
16　抱出シ　Ｂ（キィと朱傍）
一五六1　行ニ　乙ＡＢＣ
1　入レツ　乙ＡＢＣ
2　大ナル　北野乙ＡＢＣ
5　見　乙ＡＢＣ
5　魚ノ腹　諸大
6　抱テ出シツ　乙ＡＢＣ
8　具タリ　乙ＡＢＣ（Ｃはリにルと朱傍）

巻二第二十一話

一五六16　何ノ故有テ　野乙ＡＢＣ
16　令説聞給フ　ＡＢ
一五七4　不發シテ　乙ＡＢ
4　寺ノ庭ヲ　諸（庭の上に僧ありてみせけち）
4　掃治　諸（底の掃は変　即ち木偏に作る）

巻二第二十二話

一五七11　貧シテ　乙ABC

巻二第二十三話

一五八8　落テ萎タルヲ　北野乙ABC

一五八9　吹来ハ也　乙AB

11　行〆　AB（Bは〆を朱括弧で囲みイと朱傍）

12　我家ニ　乙AB

13　有ル叉サ〆　B（モトノママと朱傍）

一五九2　地ニ敷テ　乙ABC

5　自然ラ　野乙ABC

6　光ハ　乙ABC

10　此ヲ得テ　野乙AB

11　勝リタルソ　乙AB

12　宮兵ヲ罰〆　乙B

13　其時　野北乙AB

13　問テ曰ク　甲北野乙AB

15　令平腹テ　乙AB

一六〇1　長者　乙ABC（Bはヲィ、Cはヲと朱補）

巻二第二十四話

一六〇14 善光女　乙ABC（Bはニィ、Cはニと朱補）
15 善悪報　乙ABC
15 前世ノ　乙ABC
16 傳テ敬フ　乙AB（Bは傳の下にキィと朱補）
一六一1 乞匂人　甲
2 傳ヲ敬フモ　乙AB（Bはヲィにキィと朱傍）
3 宿也ト云テ　乙AB
5 夫妻ト成タム　★底―「成タレハ」
6 乞匂人　甲
8 父母ハ有カ　諸
10 隣國有シ　AB（Bは國の下にニィと朱補）
12 今ニ　乙ABC
15 跡礎　甲乙ABC
15 其ノ跡　乙AB
15 草ノ菴　野乙ABC
16 居ス　乙ABC
一六二4 成リテ　乙ABC
7 王　諸
9 宮ノ如ク也ト　諸「宮ノ如シ也ト」底大

16　歸ヌ　　甲北野乙ＡＢ
一六三1　思ヌ　　ＡＣ

巻二第二十五話
一六三8　挙テ詣テ　　乙ＡＢＣ
9　无シ〔　脱　〕　「无シ〔願クハ～傳ヘタルトヤ〕」大
（願クハ～傳ヘタルトヤ
の最後の文まで脱）

巻二第二十六話～　（大系は巻二第二十六話～巻二第四十一話、本文あり。）
巻二第四十一話
始めから最後まで脱。

三、おわりに

『今昔物語』巻二の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本ＡＢＣと東大本乙である。中でも内閣文庫本Ｂは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多い。これは、『説林』53号で論じたのと同じ傾向にあるといえる。巻一の場合には、旧日本古典文学大系の底本である鈴鹿本、東大本甲、東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（鈴鹿本、東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということがいえたが、

巻二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ない。先にも述べたように、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と一致するのは、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）であり、古態本と異なる流布本の特徴について全体的に把握する必要がありそうである。古態本が鈴鹿本をかなり正確に書写しているのに対し、何故、流布本はそれらとは異なる表記をするのか、総合的に検討しなければならないだろう。今回はその考察にまで及ぶことはできないが、今後、巻ごとの観察、分析をすすめ、最終的に、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の位置づけと共に、流布本系の古態本とは異なる表記の意味を考えてみたい。

注

1　中根「未紹介本『今昔物語』（彦根博物館所蔵）についての一考察」（『愛知県立大学説林』53号　二〇〇五年三月）

2　中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」（「愛知県立大学文学部論集」54号　二〇〇六年三月）

3　本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集一』山田孝雄　山田忠雄　山田英雄　山田俊雄　岩波書店　一九五九年によるものである。

4　酒井憲二「鈴鹿本今昔物語集研究史」（『鈴鹿本今昔物語集―影印と考証―』下　京都大学学術出版会　一九九七年）